

研究発表報告『談話論と文法論 ——日本語と韓国語を照らす』について

きむじな
金珍娥

本研究発表は日本語と韓国語の〈話されたことば〉を、談話論と文法論という2つの観点から照らすという研究についての報告である。

第1章から第5章までは、〈話されたことば〉の実現体である〈談話〉の分析に入るための、原理や概念付け、デバイスの構築を行う。第6章から第7章、第8章は、実際のデータを考察して得られた、談話の姿、いわば赤裸々なことばの姿について述べる。

まず〈序論：談話論と文法論の結合〉では、本書の目的と共に、〈談話論〉と〈文法論〉を統合すべき根拠を述べた。そこで述べたことは、真の〈話されたことば〉を見るために、2つの分野に涉ることが必要であった著者の立場であり、本書を成立させた出発点である。

〈第1章：言語の存在様式と文体〉では、本書が扱っている対象に関わる概念を、より明確なものとするため、研究において頻繁に、あるいは半ば自明のもののようにも用いられてきた術語の再定義を行っている。そもそも「言語」と呼んで研究において実際に扱っているものは何なのか、「話されたことば」や「書かれたことば」とは何なのか、「話しことば」や「書きことば」とは？「談話」や「テキスト」とは？といった問いを問うことで、本研究に関わる既存の主な論考はこうした術語をどのように位置づけているのかを見て、再検討する。この過程を通じ、本書で用いる術語の概念規定は確固たるものとなり、〈話されたことば〉の実現体たる〈談話〉を見据える研究の、輪郭を得る。

〈第2章：談話論とは〉では、本書が取り上げる〈談話論〉の定義や位置付けを行う。〈プラグマティクス〉 pragmatics、〈会話分析〉 conversation analysis、〈談話分析〉 discourse analysisの成り立ちや既存の研究の定義を照らしつつ、この3つの分野を含むものとして〈談話論〉を位置付ける。そもそも〈会話分析〉、〈談話分析〉といった名付けは、研究の〈方法論〉をもって言語学の1分野を名付けている感がある。また諸研究がこれらの境界を区分しようと試みているものの、区別しにくい点も多い。本書では〈談話論〉という名称を用いることで、これらの分野が扱っている対象や方法を含みうる言語学の領域として位置づけたい。また〈談話〉の下位範疇を位置づけ、〈談話〉の多様性と広さを確認する。

〈第3章：研究方法論〉は、〈話されたことば〉の研究において、最も重要な核を成す〈データ収集の方法〉と〈分析方法〉を述べる。〈話されたことば〉によるデータは、〈そこに行けばある〉ものではなく、〈生の人間〉からしか採集できず、そうしたデータの採集はえも言われぬ苦渋に満ちている。2度目はないという一期一会の覚悟と緻密な計画で臨まねばならない。さらに得られた〈話されたことば〉を、分析するための〈書かれたことば〉に転換する作業、それはまさに〈言語音〉

を〈文字〉にする過程であり、この過程こそが〈書かれたことば〉とは異なる、〈話されたことば〉とは何かを教えてくれる研究の真髄でもある。こうして文字化された〈話されたことば〉の談話は、分析を行うために様々な単位として区切られる。

〈第4章：談話単位論〉では、〈文〉や〈turn〉を中心とした〈談話の単位〉について述べる。とりわけ本書では〈あいづち〉と〈turn〉に注目し、既存の研究とは異なって、〈あいづちもturnとして実現する〉ことを明らかにし、〈turn〉という概念を新たに位置づけ直す。また、〈文はどこで区切れるのか〉という、まさに〈話されたことば〉こそその問いを考え、〈区切れない第3種の文〉があることを取り上げる。

〈第5章：文構成論〉では、〈話されたことば〉の談話を織りなす〈文〉の構造を照射する枠組みを考える。とりわけ文の最も核心的な部分である〈文末〉に注目し、〈述語文〉と〈非述語文〉という分析の中心的な概念を導入する。既存の多くの文法研究でほとんど言及されてこなかった〈非述語文〉は、〈話されたことば〉の談話を通じ、その存在が揺るがない確固たるものであることを見る。

第6章から第7章、第8章は、実際のデータを分析した結果と、それについての考察を述べる。データは、東京方言話者、ソウル方言話者による、日本語会話40組、韓国語会話40組、2名ずつの対話からなる計80組の〈自由談話〉による談話データである。用いられる方言や20代、30代、40代の世代別と男女別など、条件が厳格に統制され、組み合わせられた異なり人数計160人の話者が参加してくださっている。

〈第6章：文の分布〉では、〈述語文〉と〈非述語文〉をそれらの使用率という観点から日本語と韓国語の両言語を照らす。そもそも日本語や韓国語の〈話されたことば〉の談話は、どのぐらいの数の文から構成されるのか。〈話されたことば〉における文においては 一体どれぐらいの文が述語で結ばれているのか。といった基礎的な考察である。

〈第7章：〈非述語文〉論〉では、談話において、述語（・・）で（・）結ばない（・・・・）文（・）の実際の姿を照らす。第5章でも取り上げているが、文末を述語で結ばない文を、先行諸研究で述べているような「一語文」や「文の破片」などと捉えるのではなく、〈非述語文〉という観点からその出現様相を克明に調査する。形態論的な観点、統辞論的な観点、discourse syntax の観点から〈非述語文〉の解析を試みる。

「A：お住まいは？。— B：ずっと東京で。」

「A：男女比どのくらい？。— B：18人中2人とか。— A：あつしの学年も。」

といった例のように、談話の複数の話者の発話にまたがって現れ、相互作用の中で拡大される〈非述語文〉の現れ方を、“discourse syntax”（談話統辞論）という観点から照らしている。〈助詞〉類は、一般に文末に現れることを主とした働きとは見られていない。談話においては格助詞や係助詞なども文末に立ち、談話統辞論的な楽しい働きを見せてくれる。こうした〈談話統辞論的な機能〉もまた、談話の中に現れる〈非述語文〉の極めて自然な営みを物語るものである。

〈第8章：緩衝表現論〉では、日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話を成す〈文〉の文末に注目し、文末における〈緩衝表現〉の構造と類型を描く。〈緩衝表現〉とは、「一人です。」と言えるところを、「一人みたいな感じです。」のごとく表現するなど、明確さを失わせ、ぼかしたり、間接化する、〈話し手のモーダルな態度〉を示す表現を言う。〈述語文〉と〈非述語文〉という把握は、文を構造的な観点から見のものであった。〈緩衝表現〉はこれに対し、文を機能的な観点から見のものである。こうした機能的な表現の中に〈述語文〉と〈非述語文〉の中間的な姿を見せる文が多々存在することも、この章を通して発見できる。〈緩衝表現〉は「一人みたいな感じです。」といった短い文から、

「管理がずさんになっ {たり} とか} してんのかな} とか} 思っ} たんですけど。」

のように、幾つかの〈緩衝体〉がくっついた文までも多々存在する。実際に調べるとわかるように、〈緩衝表現〉はその形が非常に多様であるため、「たり」「とか」といった〈緩衝体〉は無秩序に配列されているようにも見える。しかし、こうした〈緩衝表現〉は実は、引用構造、連体修飾構造、否定の構造、アスペクト的、タクシス的な性質を有する構造、韓国語の-ㄷ(-te-)による体験法の構造など、様々な文法的な仕組みを生かし、豊かに形を造り上げてゆくのである。そこには〈剰余構造〉と〈欠如構造〉と呼ぶべき、構造上の原理的な装置の隠れていることが見えてくる。〈緩衝表現〉は、〈書かれたことば〉を中心に構築されてきた〈文法論〉の基本的な概念を広げうる言語現実ともなるであろう。

〈書かれたことば〉ではなかなか出会えない、第7章の〈非述語文〉と第8章の〈緩衝表現〉のこうした姿は、〈話されたことば〉が一体どのようなものであるかを、私たちにありありと見せてくれるのである。本研究は日本語と韓国語の〈話されたことば〉を照らす、ささやかな挑戦であり、試みである。